

## 日本語版序文

本書『実験経済学の原理と方法』の英語版が出版されてから5年の間に、実験的手法に対する経済学者の関心は増加し続けてきた。この関心の増加は、実験データに関する専門雑誌論文の数、Economic Science Associationの学会参加者、および経済学の他の専門領域において取り上げられる話題に示されている。この関心の増加は合衆国ばかりでなく、国際的にも見られる。Economic Science Associationの1998年夏学会がはじめて合衆国以外の国、ドイツのマンハイムで開催されたのがその良い例である。

英語版では、実験手法に関心のある経済学者を擁する大学や研究所などを80以上列挙していた。5年後の今、その数は疑いもなく100を超えている。日本の大学は実験的手法の国際的成長の最前列に位置しており、西條辰義先生はじめ多くの日本人研究者による研究計画は世界的な関心を引きつけてきた。

そのようなわけで、川越敏司先生から本書の英語版を核として改訂された日本語版を翻訳出版したいという申し出を受けたとき、うれしく思ったのである。

実験経済学のような急速に成長している学問領域では、5年という月日は長いものである。翻訳はこのような事情を考慮したものとなるのが適切である。本文の全9章は議論の明確化を行った以外は英語版のままであるが、巻末の付録の一部は日本の事情を考慮して削除されている。これらの変更は日本語版の訳者あとがきに記述されている。

われわれは2人とも日本語を解さないが、川越、秋永、内木、森の各先生方

がすばらしい訳書を用意してくれたものと信じている。彼らが本書に対して行った改訂や明確化は英語版の翻訳以上のものである。われわれは日本の研究者に実験経済学を紹介するこの困難な仕事を行ってくれたことに対し、翻訳者の4人に感謝している。この4人の努力が、日本および世界中の実験経済学のさらなる発展に役立つことを望んでいる。

ダニエル・フリードマン, サンタクルズ, USA

シyam・サンダー, ピッツバーグ, USA

## 目次

原著序文

謝辞

日本語版序文

### 第1章 序論 ————— 3

- 1.1 実験科学としての経済学……………3
- 1.2 科学進歩の原動力……………5
- 1.3 データの源泉……………6
  - 1.3.1 いくつかの証拠 10
- 1.4 実験の目的……………11

### 第2章 実験経済学の原理 ————— 17

- 2.1 現実性と理論モデル……………17
- 2.2 統制された経済環境……………20
- 2.3 価値誘発理論……………21
- 2.4 対応の原理……………24
- 2.5 実践的に役立つルール……………27
- 2.6 応用：Hayekの仮説……………29

### 第3章 実験計画 ————— 33

- 3.1 直接的な実験統制……………34
- 3.2 間接的な実験統制：無作為化……………36
- 3.3 乱塊法の例としての被験者内計画……………38